

第115回山口西田読書会（2016年6月11日）

第114回（同年5月28日）の Protokol

参加者：佐野、深野、桑原、谷、千葉、唐、藤村（恭）、本田*、山口、岡部（計10人）

順不同、敬称略、*は初参加

『善の研究』第3編第8章「倫理学の諸説 その四」後半（第3-7段落）

第3段落 公衆的快樂説

公衆的快樂説（功利教=功利主義）は個人の快樂を最上の善とするのではなく、社会公衆の快樂を最上の善とする。この立場を強力に主張したベンサム（原文ママ、以後ベンサム）によれば、人生の目的は快樂であり善はすべて快樂からなる。

ベンサムは快樂に種類のちがいを認めておらず、数量的な差のみを認めている。行為は行為そのものではなく、行為によって生じる結果で価値が定まる。この原理により「最大多数の最大幸福」が最上の善ということになる。

これに対し西田は、多人数の快樂を個人より上に置くことに難があると指摘した。さらに自己の快樂を捨てて他人の快樂を求める場合、快樂説の立脚地そのものが揺らぐとも言っている。

第4段落 西田の批評

4段落目では批評が本格化する。まず、快樂に性質上の差別を認める説は、快樂が唯一の基準でないことから快樂説を離れているとして、ミルを排除する。

快樂を質的に同一なものとし、その数量で行為の価値を決めるエピクロース、ベンサム、アリストippusらの説には、快樂を量的にはかることが困難であることを指摘し、他人の快樂をも計量する公衆的快樂説はなおさら困難であると言っている。

第5段落 快樂説の否定

5段落目に入ると、身の危険を顧みず他愛や理想を追求する例をあげて快樂説を否定する。犠牲的行為も快樂のかたちを変えたものにすぎないとする（快樂説の）主張には、欲求の満足によって快樂を得るからといって、欲求の満足がすべて快樂を目的としていることにはならず、原因と結果の混同があると反論している。その後、本能に根ざした先天的な欲求（自然の欲求）に論点が移っていく。

第6段落 自然の欲求

6段落目では、快樂を目的としない自然の欲求について述べている。わたしたちの自然の欲求が習慣によって獲得した第2の天性ではないかとの（快樂説からの）指摘に対して、理解を示しながらも、それですべてを説明することができないと退ける。自然の欲求は本能であり、本能は「元来生物の卵において具有した能力」であると述べている。

第7段落 善の命令的要素

快樂説を合理説よりは人性の自然に近いとしながらも、苦樂の感情によって善悪を定めることは道徳的善の命令的要素を説明できず、単に快樂のみを目的とする人があったならばそれは人性にもとった人であると括っている。